

ロイ・ビッシュジトさん

生まれつき目が見えないというハンディを努力で乗り越え、1996年にバングラデシュから来日したロイ・ビッシュジトさん。今年の4月からは滋賀県立盲学校で初めての外国人教員として、マッサージ、はりを指導する毎日だ。



日本で幅広い勉強を

先生が来日されたきっかけは。

夢にも思っていなかったのですが、ダッカ大学に入学してすぐに先生方に「日本で勉強すれば、幅広いことができる。将来、視覚障害者のために役立つ」とアドバイスされたのです。国際視覚障害者援護協会の奨学金を受けることができたので、来日を決意したのです。マッサージや、はりはバングラデシュにはないので、将来きっと役に立つと思います。

来日してすぐは日本語が分からなかったのですが、高知県の盲学校で最初の1年、日本語を勉強しながら専門の勉強をしました。その後、専攻科に入って3年間専門の勉強をしました。

でも、卒業してすぐバングラデシュに帰ってもまだ何もできません。先生方に指導いただいて、なかなか分かりにくい(笑)という筑波大学にチャレンジしてみたいと思ったのです。運良く受かり、そこで2年間勉強して教員免許を取りました。滋賀県立盲学校には今年の4月に来たばかりです。

来日前にもっていた日本のイメージはいかがでしたか。

すごくいいですよ。日本に来たことがある大学の先生も「日本人は親切だから、まったく心配しなくていいよ」とおっしゃっていましたし、小学校の教科書にも日本のことが紹介されていて、「日本人は親切で、お母さんはとても優しいから子どもたちは泣かない」と書いてあるんです。

日本語と専門分野を猛勉強

実際に来日されてからは、ご苦労も多いと思いますが。

授業中は日本語だけなので、最初はついていけなかったですね。でも先生が一生懸命、英語

で説明するテープを作ってくださいだったので、家に帰ってそれを聞きながら勉強しました。バングラデシュでも点字の本は少なく、父や先生、友だちに墨字(普通字)の本を読んでもらって、それを自分で点訳しました。夜11時まで勉強して朝4時に起きるといって毎日、日本の冬でも続けてました。苦労というよりも、慣れてるから(笑)。友だちに「間違ったら教えてー」と言ったら、みんな一生懸命教えてくれました。

ご家族と離れてのお一人暮らしですが。

ずっと寄宿舎にいたので、1人暮らしは初めてです。でも量にも慣れました(笑)。買い物は近所のスーパーやコンビニでしています。先日初めてお米を炊きました(笑)。

外国人であるための疎外感みたいなものを感じたことはありますか。

ほとんどないですが、1度だけ筑波大学に入ってからマッサージのアルバイトを紹介されたとき、外国人でもいいと言われて、実際に行ってみるとだめだと言われたことがありました。私は免許も持っているのに「顔を見ると外国人だと分かるから」と言われたときはショックを受けました。中国人や韓国人なら大丈夫だったでしょう。それだけで、あとはたくさんアルバイトもできましたし、これからも心配はしてないです。「日本には鎖国時代があったから、まだその感覚が少し残っているんだ」と(笑)教えてくれた人もいます。これも勉強のひとつです(笑)。

バングラデシュの視覚障害者

バングラデシュでの視覚障害者への教育はいかがですか。

形式的には、政府が運営する盲学校を各県に1つずつつくるといって動きがあります。先生が1人だけしかいなかったり、生徒がいないということもありますが。ほかに外国の援助を受けたABC(Assistance for Blind Children: 視覚障

害の子ども支援団体)が運営する学校が7か所あります。ここは小学校から高校まであって、10人が入れる寄宿舎もあるんです。私もABCの出身です。

日本とバングラデシュの現状を比べていかがですか。

仕事に就くのが難しい。一般的に失業率が高く、日本とは比べものにならないです。目が見えても大学を出ても仕事がなかなかないですね。バングラデシュには100万人ほどの視覚障害者がいるのですが、そのなかでいちばん多いのは電話交換手です。教師もいますし、弁護士は2人います。ほかには音楽をやっている人もいますし、イスラム教の国ですからコーランを覚えて朗読したり説明したりする仕事もあります。

もちろん点字にも違いがあるんですね。

言葉は違いますが、6点の組み合わせという基本は同じです。小さい頃からやっていたので、日本に来てからも問題なかったですよ。

視覚障害者の職業的自立を

滋賀県に来ていかがですか。

みなさん親切でよかったです。でも東京は人が多いのでよく声をかけてくれたのですが、こちらは人が少ないですね。先日、南彦根駅の近くですごく深い溝に落ちたんですよ。人が手を貸してくれたので、はい上がったんですが、私のような視覚障害者が道に迷ったり、困っているように見えたら、声をかけてほしいですね。

マラソンが好きなんですが、こちらでも伴走者を見つけられたのはよかったです。伴走者は自分より少し速い人がいいんです。曲がるときや段差があるときに知らせてもらうためロープを持って走ります。

フルマラソンを3回完走されたとか。

バングラデシュでも100m走をやっている年に3、4回大会に出たこともあったんですが、高知県の盲学校では体育の授業が楽しくてだんだん距離を伸ばしてきたんです。

これからの抱負や夢をお聞かせください。

先生に「夢は大きく、そのための努力を」とよく言われました。いつになるか分かりませんが、これまで勉強してきたことを、バングラデシュの視覚障害者の職業的な自立に役立てたいです。あとはマラソンのバングラデシュ初代表としてパラリンピックに出られたらいいですね。伴走は日本人にお願いしたい(笑)。実現できたらいいな。



プロフィール

1978年1月1日、バングラデシュ、ネトロンコ生まれ。先天性の全盲障害。1995年ダッカ大学文学部哲学科入学後、国際視覚障害者援護協会の奨学金を受け1996年来日。2000年、高知県立盲学校専攻科理療科卒業。2002年3月、筑波大学理療科教員養成施設で教員免許を取得。2002年4月、滋賀県立盲学校に同校初の理療科教員として赴任、マッサージ・はり・病理学を担当。